

フィリピン人はなぜみんな英語が話せるのか

前在フィリピン日本国大使館附属マニラ日本人学校 教諭
千葉県松戸市立相模台小学校 教諭 中馬 暁子

キーワード：英語教育、現地理解教育、国際理解教育

1. はじめに

派遣1年目に命ぜられたのは中学校英語教員、それまで小学校教員経験しかない私にはまさに青天の霹靂であった。そのうえ、派遣国フィリピンは英語を公用語の1つとして使用している国でもあるため、日本人学校在籍児童生徒の英語力に大きな差があった。そのような環境下で模索した英語指導の実践と、フィリピン国内の学校で行われている英語教育から考えるべき日本の英語教育の課題を、ここに紹介したい。

2. マニラ日本人学校児童生徒にとっての英語

マニラ日本人学校には、たくさんの国際結婚家庭児童生徒が通っている。全体の割合としては3割程度であるが、派遣1年目に副担任をした中学部1年生、派遣2年目に担任をした小学部6年生においては5割、派遣3年目の小学部1年生においては2割と割合的には低かったが、発達段階もあって日本語をほとんど理解できない状況からスタートした児童もいた。多様な家庭環境や言語環境を背景にもつ日本人学校の児童生徒にとって英語とはどのような存在なのか、その実態を探った。

(1) 仮定した位置づけ

①第2言語としての英語

第1言語である日本語は幼少期にしっかりと確立しており、ベースである日本語に加えて新たな言語として習得がなされる場合。両親のどちらか一方が外国人であっても、夫婦間や親子間の会話の全てが日本語で行われている家庭もここに含める。

②母語としての英語

保護者のどちらか一方もしくは両方が使用する言語が英語である場合。母親がフィリピン人、父親が日本人の場合、両親の母国語はそれぞれタガログ語と日本語であるが、両親の共通言語は英語のことが多く、その結果児童生徒にとっては母語が英語となる。

③母国語としての英語

保護者のどちらか一方の母国語が英語である場合。例えば、父母どちらか一方の保護者がイギリス国籍やオーストラリア国籍の場合がこれにあたる。

④環境言語としての英語

入学前や家庭において使用される主な言語が英語である場合。例えば、マニラ日本人学校入学前にインターナショナルスクールでの経験しかない児童生徒がこれにあたる。この場合両親ともに日本人であっても、環境言語としての英語が与える児童生徒にとっての影響は大きい。

(2) 調査結果

児童生徒の6割にとっては外国語として英語が存在する一方で、4割にとっては母語、母国語、環境言語と生活に欠かせない自分を表現する手段のひとつとして英語が存在していた。彼らは、日々の生活のなかでおそらく思考する言語と表現する言語のなかに、英語と日本語が混在するのであろう。結論を先に言う英語と結論を最後に言う日本語の言語構造の違いを、どのように児童生徒が消化しているのかが興味深いところである。

3. 日本人学校における英語指導

(1) 英会話教育

小学部全クラスで週2時間、中学部全クラスで週1時間行っている。全児童生徒を能力別に6クラスに分け、フィリピン人講師の指導のもと独自の教科書を用いながら日本人教員がT2として巡回しながら行っている。「英会話」といっても、話す・聞くにとどまらず、書くことや読むことにも取り組ませる。学習を進めるなかで児童生徒の興味・関心が文字に向いていく実態だけでなく、国際結婚児童家庭の多くは話すことができても書いたり読んだりすることができない。そのためにも、文字の指導は必要不可欠であった。また、言語習得の過程としても話したり聞いたりする外部からのインプットがある程度の量までいくと、必然的に文字への興味関心が高まったり教授のなかで文字に触れることなしでは授業を進められないところもあるので、文字の導入はとても有意義なものであったように思う。

(2) 英語教育

中学部の英語科では当然学習指導要領に基づいて教育活動を行っている。しかし、前述したとおり生徒のレベル実態は初めてアルファベットに触れる生徒から英検一級取得済みの生徒までそれぞれである。本来であれば習得度別クラスや授業内容が望ましいのかもしれないが、生徒数から各学年1クラス・英語教師も1名というなかである程度は同じ活動をさせねばならなかった。

英会話教育との違いをはっきりさせるためにも、英語科の方ではしっかりと単語を書かせたり読ませたりする指導や長文読み取り、文法の習得など、なんとなく小学部や英会話で知っていた知識を各々が頭のなかで整理できるような指導を行った。英語科定期テストの平均点や英検の合格率が日本のそれよりも高い点からも、英会話教育と英語教育が密接な関わりを持ちながら児童生徒の能力を高めていると感じられた。

4. フィリピンの教育

派遣期間中に公立校・私立校・特別支援学校・インターナショナル校、と様々な学校の視察を行った。フィリピンのその就学率は94%と高い。そのなかでも、首都圏マニラのマカティ市内公立校を紹介したい。

マカティ市は非常に経済的に恵まれており、ここに通う児童生徒は制服や授業料、学用品においてまで、すべて市から無料で支給されている。そのため、子どもの教育のことを考えてマカティ市に流入してくる人の数は増加の一途をたどっているようだ。視察を行った1年生の学級は1クラス40名であった。K-12（幼稚園から高校までの無料教育期間）の本格的導入を受け、市教育委員会がきちんと指導や研修をおこなっているせいか、教師の意識も高く、授業内容もとても充実した物であった。

(1) 2言語教育 (Multi Lingual Education)

授業にはタガログ語と英語の2言語が用いられていた。1年生においては、使用率はタガログ語9割、英語1割といったところである。基本的な説明はすべてタガログ語で行い、式と答えや算数的用語（しき、こたえ、合計、など）は英語でも復唱させるという形を取っていた。3年生ぐらいになるとタガログ語と英語の使用率はほぼ逆転し、高学年に至っては理科や算数に関しては全て英語で行っていた。

(2) 学習内容

入学して3ヶ月の児童であるが、学習内容は2桁たす2桁（くりあがりなし）の筆算であった。日本の小学1年生の学習に比べるとかなり難易度が高いと考える。ただし、10の位の「1」も1の位の「1」も同様に扱うなど、数字の概念や仕組みを徹底的に教える日本の算数に比べて、ただ単純に計算ができるようにする教育という印象が強い。そのため、1桁たす1桁の学習も、後半は横式ではなく縦の筆算方式で学習を進めるようだ。今後繰り上がりには10進法の概念が必要不可欠であるためどのように学習を進めていくのか興味深いところであった。

5. おわりに

派遣国フィリピンはほとんどの国民がタガログ語と英語の2ヶ国語を話す。基本的にはフィリピン人同士はタ

タガログ語で会話しているし、家庭での使用言語もタガログ語であるらしい。フィリピンの英語人材の輸出は近年目を見張るものがあり、経済的に困難な状況を抜け出す一つの手段が英語力となっている。実際に現地公立校では2言語教育をすべての教師が学んでおり、そのために気をつけることや児童生徒が言語を身につける過程をしっかりと把握している。そのような環境の中での英語教育や多言語教育の役割や成果は大きい。日本人学校の児童生徒にとっても英語は非常に身近なものであり、道具としてそれなしに生活していくことは実質不可能である。日本人にとってもフィリピン人にとっても、つまりは、英語が必要なのである。フィリピンという国で生きるために身に付けたいと思う環境や英語で話しかけられるインプットの多さ、わかったときの嬉しさや通じ合うことの喜びなど、すべての要因が複雑に絡み合っている。

国際的に英語力が求められているのは紛れもない事実だ。しかし、そのためにただ単純に英語の時間を増やしたり、すべて英語で行う授業を導入したりするだけでは子どもたちの英語力が向上するとは思えない。小学部1年生生活科の授業で「フィリピンと仲良くなるにはどのようなことが大切だろう」という学習をしたところ、「フィリピンを大事にする、知る、ほめてあげることが大切」という答えを1年生児童自らが導き出した。まずはこのような気持ちを育てることが真の国際人として大切なことであり、その気持ちをもった日本人が気持ちを伝えるための手段として英語を学んでいくことが本来の順番ではないだろうか。これらのことを考えていく中で、英語を話せる日本人の育成や日本が行っていくべき英語教育の姿が見えてくるような気がした。